

## はじめに

この世界がどのような世界なのか、そしてこの世界が今どのような状態にあるのか、このことをもう一度考え思案することは、今もっとも大切なことである。

たんへとなに事にてもこのよふわ

神のからだやしんしてみよ (ふ 3 : 40、135)

また、親神の懐に住む私たちは、その懐を人間の手で壊し、汚していることも思案すべきである。そのためには、心に潜む「ほこり」を取り払い、確かな拠り所を再認識すべきである。

みなせかいのむねのうち

かゞみのごとくにうつるなり (み 6 : 3)

世界にはいかなる事も皆映してある。

それ世界に映る。世界は鏡や。 (さ 22・2・4)

## 「諭達」の中からヒントを探る

中山善司真柱は、「諭達」第 1 号（平成 10 年 10 月 25 日）の中で、「世界は未だ争いの絶え間なく、飽くなき欲望は生命の母体である自然環境をも危うくして、人類の未来を閉ざしかねない。人々は、我さえ良くば今さえ良くばの風潮に流れ、また、夫婦、親子の絆の弱まりは社会の基盤を揺るがしている。まさに今日ほど、世界が確かな拠り所を必要としている時はない」と今日の世界情勢について触れ、「確かな拠り所」の必要性について強調した。

また第 2 号（平成 14 年 10 月 26 日）でも、「確かな拠り所を持たぬが故に、我欲に走り、安逸に流れがちな人々に、心の定規を提示し、元なるをやの思いををいがけることは、よぶくに委ねられた使命である。先ずは、自らが教えに基づく生き方を日々実行し、身近な人たちに信仰の喜びを伝えることが肝要である」と述べ、よぶくの使命を明確に示した。ここでも、「確かな拠り所」の重要性を示し、「教えに基づく生き方」の実行を強く促した。

さらに第 3 号（平成 24 年 10 月 26 日）では、「慎みを知らぬ欲望は、人をして道を誤らせ、争いを生み、遂には、世界の調和を乱し、その行く手を脅かしかねない。我さえ良くばの風潮の強まりは、人と人との繋がりを一層弱め、家族の絆さえ危うい今日の世相である。まさに陽気ぐらしに背を向ける世の動きである。心の拠り所を持たず、先の見えない不安を抱える人々に、真実のをやの思いを伝えて世界をたすけることは、この教えを奉じる者の務めである」と述べた。そして、慎みや「心の拠り所」を持つことなく我欲に走る人々に対し、「をやの思い」を伝えることはよぶくの「務め」である、と明確に示した。

今日の社会状況は、「諭達」第 1 号が発布された平成 10 年ころとほとんど変わっていない。「世界は未だ争いの絶え間なく、飽くなき欲望は生命の母体である自然環境をも危うくして、人類の未来を閉ざしかねない」。また「夫婦、親子の絆の弱まりは社会の基盤を揺るがしている」。とくに今日、「人々」だけでなく、国家も我欲に走り、安逸に流れがちになっている。それゆえ、私たちは「心の定規を提示」し、「をやの思い」を「人々」に伝えることが、重要な使命としてあるのである。

真柱は、真柱を継承してから今日まで、一貫してこのことを強調している。その間も、争いは絶えることなく、むしろ我欲は拡大し、人々の心は荒み始めている。このことに、真柱は心を痛めているのである。ようばくお互いは、「確かな拠り所」をしっかりと心におさめ、「陽気ぐらしに背を向ける世の動き」を冷静に見定めなければならない。

それは、社会のあらゆる分野について言えることであり、エネルギー問題もその一つである。

## 「火・水・風」を活かしたエネルギー利用

平成 23 年 3 月 11 日、東北地方の太平洋沖でマグニチュード 9.0 の巨大地震（東北地方太平洋沖地震）が起きた。その時に起きた大津波は、東京電力福島第 1 原子力発電所を襲い、大規模な放射能汚染事故をもたらした。それによって、再生可能エネルギーが再評価され、再検討されることは至極当然であり、これも親神からの重要なメッセージと考えることもできる。

私たちは、自然環境に大きな負荷を与えない「火・水・風」のエネルギーシステムを再考し、それを活かした社会システムづくりを模索すべきではないだろうか。それは、親神の「懐」を汚さない一つの実動であり、「教えに基づく生き方」でもある。「陽気ぐらし」の実現は、まさにその先にあると考える。

原子力発電は、石油・石炭・天然ガスなどと同じ「火力発電」と同じシステムだが、事故が起きた時に与える自然環境への負荷は甚だしく大きい。むしろ、太陽光発電や太陽熱発電といった「火」を用いたエネルギーシステムへの転換は、自然環境への負荷を考えると、より理に適っている。

また「水」を用いた発電のうち、大規模ダム発電ではない水車を利用した小水力発電、また大型風車ではない中・小型の「風」力発電システムの普及を図ることは、自然環境への負荷を最小限に抑える意味においても、より理に適っている。

これら「火・水・風」の活用は、発電システムではないが、江戸時代の建築様式にすでに組み込まれている。たとえば深い縁側は、夏の強い日差しを室内に通さず、冬の穏やかな日差しを部屋の奥に通す役割を担っている。また風の通り道には窓を配置し、涼しさを最大限利用できるように建てられている。さらに屋敷林や庭木、坪庭などは、部屋の隅々に適度な湿気を送り込むよう、適切に配置されている。

「火・水・風」の活用は、まさに日本の風土に適っている。

## 必要としている「確かな拠り所」

自然環境に強い負荷を与えない再生可能エネルギーのシステムづくりは、親神の懐を壊さない社会システムづくりでもある。とくに化石燃料を不可逆的に消費し、放射能漏れ事故の不安が残る火力発電システムの活用は、今後の大きな課題である。

私たちは、「飽くなき欲望は生命の母体である自然環境をも危うくして、人類の未来を閉ざしかねない」ことを、心にしっかりとおさめなければならない。まさに、今日ほど「世界が確かな拠り所を必要としている時はない」のである。

「確かな拠り所」があつてこそその「陽気ぐらし」なのである。